

文化

新

なら

民俗通信

16 勺 楠子

歩く前川佐美雄

▼「尺度を『え』る」
大和出身の代表的歌人に、
春がすみいよと濃くなる真夏
間のなにも見えねば大和と思
へなどて知られる前川佐美雄
(一九〇三~一九九〇)を挙げ
て、異論のある人はいないだろ
う。

しかし、前川佐美雄の短歌界
で、前川佐美雄という歌人は、
どこか私たちの尺度を『え』てい
ることもあると述べている。
十七歳で佐木信綱主宰の短
歌結社「心の花」奈良支部発会
式に参加した佐美雄は、その後、
マルクス主義の影響を受けた
が、あきたらずシユルレアリスト
ムを通して新芸術派運動を推

進。第一歌集『植物祭』を刊行
し、モダニズム短歌の旗手とし
て活躍。自ら「日本歌人」創刊
後、同じく大和生まれの保田與
重郎の日本浪漫派に寄り、終戦
を迎えた。

小高は佐美雄の戦中の在り方
を、「現実どきのように折り合
いをつけるかの苦惱」から「結
局彼の救済の道は大和であり、
古典的均衡の世界でしかなかっ

た」と厳しく批評。戦後も「雌
伏を経て、獲得した詩的境地は
美を徹底する「新しい風狂の
道」(武川忠二)であったよう
だと手厳しい語尾を用いて締
めくづっている。

とはいって、現代短歌アンソロ
ジーの良書として知られるこ
の本は、前川佐美雄から始まっ
ている。小高が、現代短歌の起
点に佐美雄を置いていたことは
間違いない。

▼「大和六百歌」

明治三十六(一九〇三)年、
奈良盆地の南西端、葛城山の麓

奈良の思い出 淡々と

住。以後、疎開の一時期を除き、
神奈川県茅ヶ崎市に移住する昭
和四十五(一九七〇)年末まで
の約三十八年間を坊屋敷町に暮
らした。

茅ヶ崎移住の翌年には、歌集
『大和六百歌』が刊行された。
あとがきには、父の死によつ
て帰郷することになった佐美雄
の、鬱屈(うつくつ)した気持
ちが、時を経たせいか、むしろ
あつけらかんと書かれている。

まとめられている。
あとがきには、父の死によつ
て帰郷することになった佐美雄
の、鬱屈(うつくつ)した気持
ちが、時を経たせいか、むしろ
あつけらかんと書かれている。

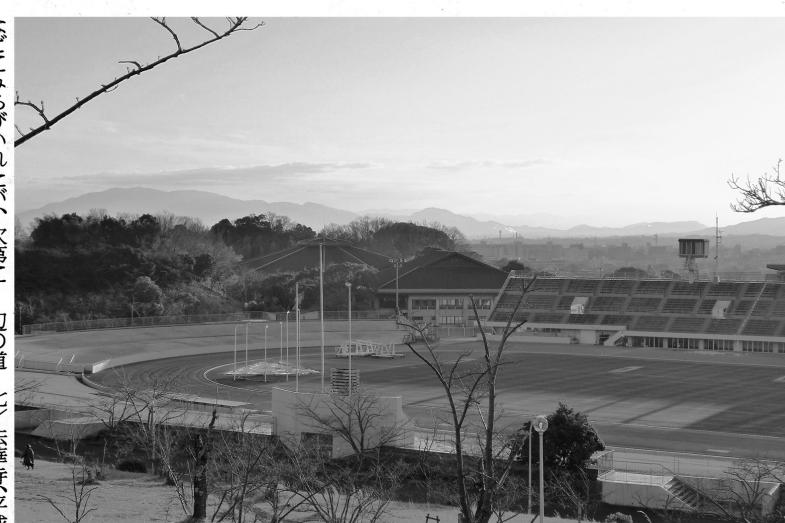
「奈良の生活はたいくつだ。
あとがきには、
二十年から今日まで、およ
そ五十年間、新旧入り混ざりで
ある。見苦しいけれど、やむを
えない」とある。

次稿で詳しく見てゆきたいと
思うが、「みさき道」には次
のよくな文章がある。

目次は、猿沢池の水／月堂
のお水取り／みさき道／統・
寺／薬師寺。

(略)それで寺へ、古寺に行くこ
とになる。そして住持とも親し
くなり、諸仏諸像を見る。こうし
て大和の名だたる古寺はおおか
た知る。今なら車だが、そのこ
ろは電車、そして歩くのである。
はじめは和辻哲郎の『古寺巡礼』

「私はよく佐保山を歩いた。
(略)つい佐保山の方へ足が向
くのである。もちろん戦前のこと
だが、家を出て、まむかいの奈
良女高師の北がわにまわる。こ
こで橋を渡る。木橋で、数人が
一度に渡るといまに落つこちそ
うだ。(略)むかしの一条路に添
て瓦ぶきに交つて藁屋根の農
家がたち並んでいた。佐保村大
字法連である。ホウレイといつ
ていたが、いまはホウレンであ
る。上方からとり水して来た
のが家いえの前を流れていた。
清冽であった。音をたてていた。
農家はそこですぎものなし
ていた。私はこのあたりをむか
しの「佐保の内」と思つたり
する。(略)聖武の佐保山南陵の
西がわの細道をのぼつて行く。
道を左にまわると鴻の池であ
る。かなり広い池で、ちょっと
うす氣味悪い。(略)この奥にト
ンネルがある。関西線が加茂駅
から奈良駅へ通じていたのが廢
せられた、そのあとである。



佐美雄が見た鴻ノ池は運動公園に整備された。奥には遠く葛城山が
そびえる=奈良市法蓮佐保山

くのである。もちろん戦前のこと
だが、家を出て、まむかいの奈
良女高師の北がわにまわる。こ
こで橋を渡る。木橋で、数人が
一度に渡るといまに落つこちそ
うだ。(略)むかしの一条路に添
て瓦ぶきに交つて藁屋根の農
家がたち並んでいた。佐保村大
字法連である。ホウレイといつ
ていたが、いまはホウレンであ
る。上方からとり水して来た
のが家いえの前を流れていた。
清冽であった。音をたてていた。
農家はそこですぎものなし
ていた。私はこのあたりをむか
しの「佐保の内」と思つたり
する。(略)聖武の佐保山南陵の
西がわの細道をのぼつて行く。
道を左にまわると鴻の池であ
る。かなり広い池で、ちょっと
うす氣味悪い。(略)この奥にト
ンネルがある。関西線が加茂駅
から奈良駅へ通じていたのが廢
せられた、そのあとである。

民俗文化研究所事務局長
(次回は3月4日付、この項
つづく)